

な気持ちで夏休みを迎えることになったことでしょう。アメリカのボランティアの感覚が、日本でも難しい問題を解決する力になることは、十分に考えられます。

◆ ドアをすりぬける

アメリカやヨーロッパなどの国から帰国した生徒たちは、駅や店の入り口などでドアを押して入った時は、後に人がいないか確かめ、誰かがいればドアを押さえて待つように教えられています。当然、後から来た人は、感謝の気持ちを表した上で、代わってドアを押さえ、さらに後ろから来る人に渡すということになるはずです。ところが、日本のデパートの入り口などでドアを押さえていると、後から来る人は押さえている横を通り抜けて行きます。これでは、いつまでたってもドアから離れることができないので、「日本人はマナーが悪い」と憤慨することになります。ところが、普通、日本では、後から来る人は前の人にドアを押さえてもらうことを期待していないので、ドアが自分の方に向かって閉まって来ても平然と受け止め、特に困ることはありません。わざわざドアを押さえている人は、そこに留まる理由があってそうしているように見えてしまうのです。

私も、アメリカから帰国して間もないころ、ドアから離れられなくなって戸惑う経験をしましたが、押したドアをそのまま離れて通り抜けるのはどうにも気持ちが悪いので、急いでいないかぎり、すり抜けられるのを覚悟で押さえるようにしています。気のせいか、最近では会釈をしてドアを受け取ってくれる人が多くなってきたように思えます。それが、海外を経験した人が増えたことや、日本にたくさんの外国人が住むようになったことと関係があるかどうか分かりませんが、ドアを押さえる文化が日本の生活の中で理解されるようになってきたのであれば、ドアを通る時後ろの人を振り返る余裕ができ、少しは都会生活のストレスを減らすことができるかもしれません。

◆ 出船入船

啓明学園には、柔道やダンスなどに使う小さい体育館があります。そこに入るときは、生徒たちは上履きを脱ぎ、入り口の段の下に揃えておきます。ある先生は、靴を船になぞらえて、「出船の方向に揃えなさい」と指導していました。そうしておけば、みんなが一斉に出てくるときにも自分の靴を簡単に見つけ



留学生の発表を聞く高校生

ることができ、すぐに歩き始めることができます。たくさんの靴が同じ方向を向いてきれいに並んでいるのは気持ちのいい光景でもあります。これは、合理的なよい方法なのですが、約束事として子どもたちに教えなければ、自然にはできるようになりません。「入船」の方向に脱いだ人に注意したり、だれかが脱ぎ散らかしてしまった靴を黙って揃えておいたりする働きも必要になります。ときには、みんなで話し合って約束を再確認したり、いつも揃えるのを忘れる人に反省を促したりする場面もあるでしょう。生徒たちは、知らず知らずのうちに、社会の秩序を守る方法を実習していることになります。

日本中のほとんどの学校で、同じような指導がされているだろうと思いますから、このような靴の脱ぎ方は、次々と伝えられて行く日本の文化と言えるでしょう。公共の場所で靴を脱ぐ場面がほとんどない国から来た留学生たちには、この習慣は興味深く映るようです。これを体験した彼らは、問題解決のための新しい発想を持ち帰ることになるのではないのでしょうか。

いずれにしても、自分が知っているもの以外は受け付けられない固い頭を持っていては、他の文化からよいものを学んで自分たちを豊かにしていくことはできません。アメリカで生活する子どもたちは、日々多様な文化にさらされ、柔軟な対応をせざるを得ない環境で成長しているのですから、日本の大人としては、彼らに期待をかけたくなってしまいます。子どもたちには、今の生活を十分に楽しみ、たくさんのことを吸収してほしいと思います。



「自分が知っているもの以外は受け付けられない固い頭」
先生のこの言葉は、「先入観」「予断と偏見」などとも言い換えられるのでしょうか？

その「固い頭」を柔らかくすることが、これからのグローバル化・多様化していく社会を生き抜いていかなければならない子ども一人ひとりの「生きる力」の向上につながっていきます。そして、「柔らかくする」ための最高のトレーニングが海外生活体験の中にあります。それこそが、帰国した子どもの最高の「宝」とであると、私は確信しています。

このお話はその大切さを示している、と私は思います。皆さんは？

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : www.keimei.ac.jp E-mail : kokusai_info@keimei.ac.jp